

## 第7章 まとめ

### 1. 平安時代以前の遺物・遺構

#### A. 遺 物

縄文時代晩期の土器はいわゆる浮線文系の土器で県内ではあまり例を見ることができない。距離的に近い例では長野県氷遺跡（永峯1969）御社宮司遺跡（百瀬ほか1982）等がある。これらの土器群は東海系の条痕文系土器群を伴うことが多く、現在櫻王段階に比定されている。平安時代の遺物についても完形品が少なく、明確に時期設定ができるものは少ない。この中で比較的特徴を有するものが第12図5及び7である。7は底部が回転糸切り底で強いヨコナデを下半にもっており器高は低い。今池編年（坂井1984）によるV・VI期（およそ9世紀中～後半）にあたると考えられる。5の碗は底部回転糸切り、口縁部が外に張り出すもので、このような口縁部形態はあまり出土例がないが、体部下端に強いナデが加えられることなど、今池編年のVI期ぐらいに当たるのではないかと考えられ、これらから、当遺跡出土の平安時代の土器は、およそ9世紀後半～10世紀前半くらいに位置付けられるものと判断される。したがって共伴した製塩土器についてもやや幅をもたせ、およそ9～10世紀前半の所産と考えてよいと思われる。

#### B. 遺 構

焼土の検出されたSX21・33～35は、周辺から製塩土器が出土していることから製塩土器に関連した遺構と考えられる。しかし製塩土器の出土量は製塩遺跡にしては非常に少量であり、実際に製塩が行なわれたかどうかは明確ではない。このように焼土や炭化粒を含んだ遺構として刈羽大平遺跡（品田1983）に同様の土坑が確認されており、やはり平底のバケツ状製塩土器が出土している。また新潟市出山遺跡でも皿状に凹んだ炉で底部に細片の敷きつめられているものが検出されている（関1986）。このほか、佐渡の送り崎遺跡においては石敷きの炉が確認されている。

#### C. 県内の製塩土器について

我国における製塩遺跡は、縄文時代まで遡るが新潟県においては縄文時代・弥生時代・古墳時代の製塩遺跡は確認されていない。県内における製塩は奈良時代に入ってからのこととされ、佐渡地方においてよく知られており、背の沢古墳（本間ほか1966）、送り崎遺跡（金沢1966）等がある。

他に栗島の茂崎鼻遺跡（本間ほか1972）、新潟市出山遺跡（関ほか1986）、最近の発掘では柏崎市刈羽大平遺跡（品田1983）等がある。現在県内で確認されている遺跡は佐渡に圧倒的に多く約60ヶ所、本土では約10ヶ所である。ここでは県内出土の製塩土器について概観してみたい。

### 1. 出山遺跡（新潟市太郎代字出山）（第35図）

新潟市の北東太郎代と亀塚浜集落の中間に位置し、いちばん海岸よりの（海岸から300～500m）砂丘列下の存在する。新潟東港の造成工事中に発見され、昭和44年に新潟県教育委員会が調査主体となり緊急調査が実施された。遺構については、長径1mの長楕円の製塩炉が数基確認され皿状に凹んだ底部には土器の細片が敷きつめてあったという。

#### 遺物

今回、未発表資料についてその一部（県教委蔵）を図示したが、図示したタイプの他、底部径20cm以上の所謂バケツ状をした大形品も混在したようである。

#### 製塩土器（1～26）

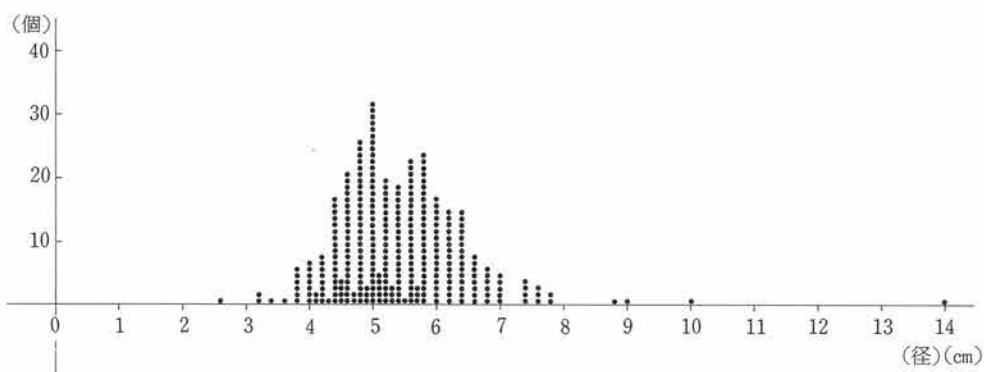
ほとんどが細片化してしまっているために全体の器形を窺い得るものはないが、おそらく1のような器形になると考えられる。底部の固体数はおよそ300個を越える。器形は底部からゆるく開き、口縁部にかけて大きく外方に開くものである。口縁部形態により3つに分類される。

a類（1～3） 口縁部の開きが大きく推定口径11～14cmを測る。1は推定口径14cm、高さは16～17cm、底部4～5cmくらいになると思われる。黄茶褐色で堅く焼きしまっている。器厚は3～4mmと薄い。内部及び口唇部は指によるナデ、外面には粗いケズリが見られ、器壁の厚さは一定しない。輪積み痕はほとんど見られない。2、3も1と同様であるが、口唇部の形態にやや差がある。

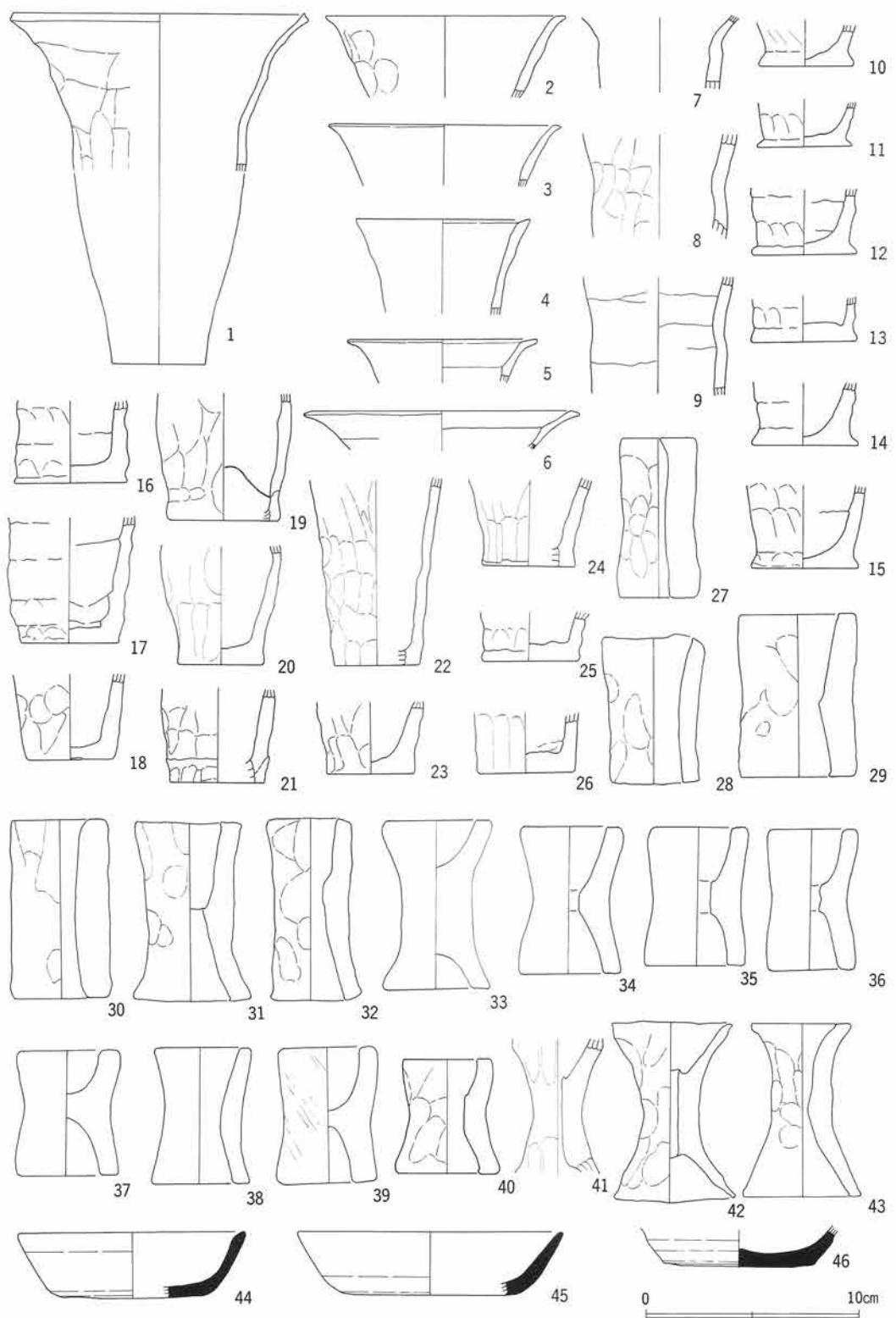
b類（4） 口縁部は開きが小さく、推定口径8cmを測る。

c類（5、6） c類は口縁部内面に強いナデを加えることにより稜を作り出しているものである。5は推定口径9cm、6は13cmである。

7～9は胴部破片である。9には輪積み痕が残存する。また底部（10～26）についても、底部がやや外方に張り出すもの（10～15）とそうでないもの（16～26）の2つに分けることができる。



第34図 出山遺跡出土製塩土器底径分布図



第35図 出山遺跡出土土器 (1/3) (10~17, 25・26, 33~39は関ほか1986原図)

やはり内面にナデ、外面はケズリである。いずれも二次焼成を受け、剥落やヒビが多く見られる。底径についてみると5~6cmを中心として4~7cmのものが大半を占め(第34図)、ほとんど同形、同大のものが大量に作られたことがわかる。

#### 土製支脚(脚台)(27~43)

これについてもかなりの数にのぼるが、製塩土器に比べると比較的完形品に近いものが多く認められる。器高により3つに分類される。

a類(28、34~40) 高さ7cm前後のものである。口径は4~5cmでいずれも二次焼成を受け炭化物の付着しているものも見られる。内面はナデ、外面はケズリや指の押さえにより整形されており両端部は面取りされる。中央が貫通しているもの(28、34~36、38、40)とそうでないもの(37、39)がある。

b類(27、29) 高さ8cm前後のものである。27は細く、口径4cm、29は太く、口径5.6cmとなる。いずれも両端部面取りされ、貫通している。

c類(30~33、41~43) 高さ9cm前後となるものである。円筒状となるもの(30~32)、及び中央が細くしほられ鼓形を呈するもの(33、41~43)がある。成形技法等は他と同様である。33のみが内面貫通していない。口径はいずれも5cm前後である。

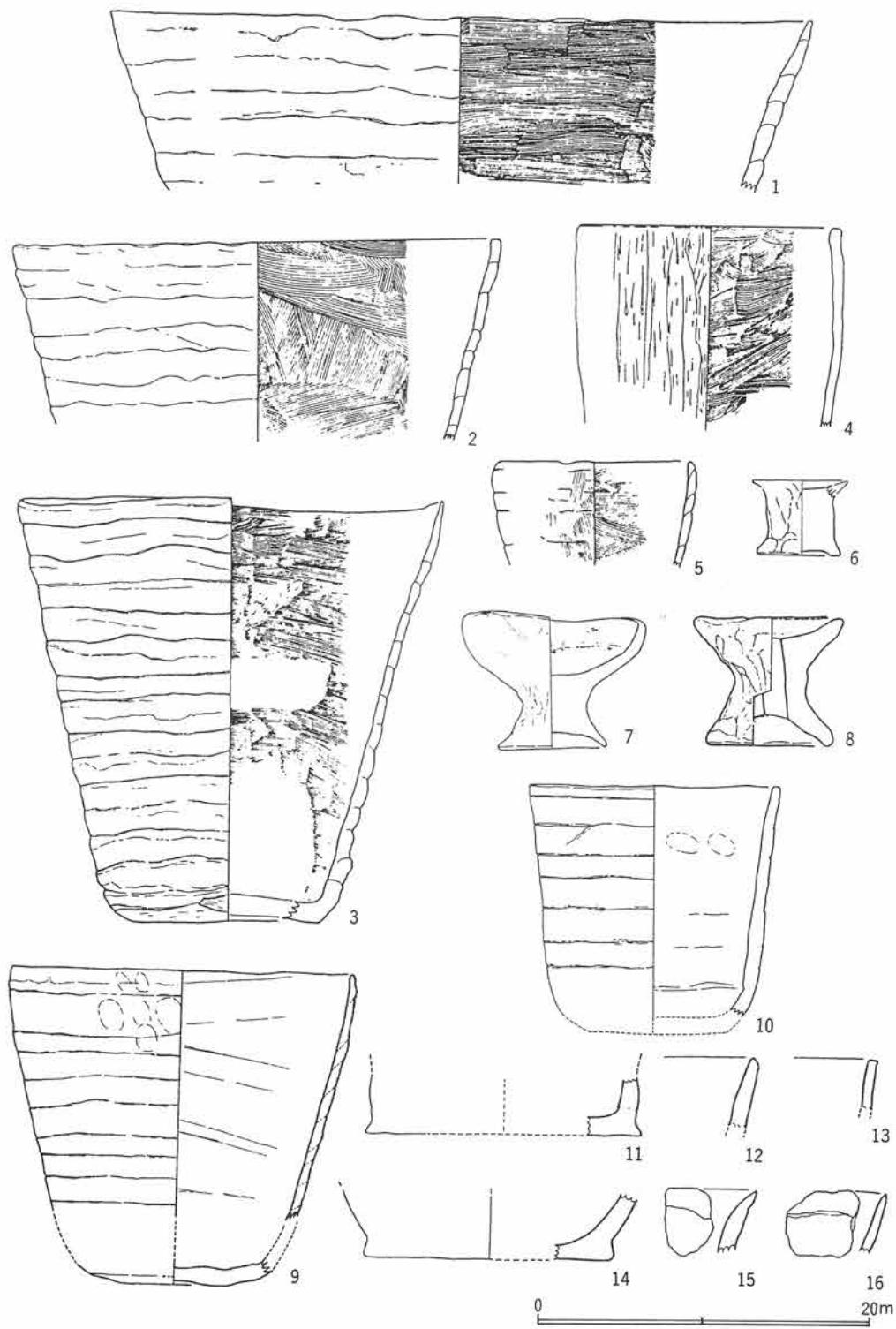
#### 須恵器(44~46)

以上の製塩土器に伴うかどうかは明確でないが須恵器が出土している。44は推定口径10.7cm、器高3.1cmを測る。黄灰色を呈するが焼成は良好である。体部は外方になめらかに立ち上り、口縁部で少し肥厚し、端部丸くおさまる。内外面共にヨコナデ調整で、底部はヘラ切りである。45は推定口径12.4cm、高さ3cmを測る。灰色を呈するが胎土内に小砂利等を含み、44に比べるとなめらかさを欠く。外方に細くなりながら延び、端部は丸くおさまる。底部ヘラ切り。46は底径7cmを測る。胎土、焼成は44と同様である。底部ヘラケズリ。内部ヨコナデの後中央部に指によるナデが加えられる。

#### 2. 刈羽大平遺跡(刈羽郡刈羽村字大平)(第36図1~8)

当遺跡は柏崎平野の北方の海岸部に近い砂丘上に所在する遺跡で、柏崎刈羽原子力発電所建設に伴い柏崎市教育委員会により昭和57年に発掘調査が実施され、製塩遺構及び製塩土器が出土した。製塩炉と思われるものは浅い不整形の土坑で焼土粒やカーボンを含んでいる。

出土した製塩土器は平底のいわゆるバケツ状の土器である。口径法量的には3種類が出土している。1のように口径が40cmを越えるもの、2、3のように25~30cmくらいのもの、4、5のように10~15cmくらいのものである。いずれも輪積み痕を明瞭に残し、内面は刷毛調整される。4は器形が筒状を呈し、外面はタテのケズリが見られる。底部は平底であるが、やや丸味をもっており、また厚さも体部と変わらないことは、立ノ内遺跡出土のものが底部を厚く作り、角ばると対称をなしている。またこれと共に土製支脚(脚台)が出土している(6~8)。大(7、8)は口径9cm、高さ8cm、小(6)は、口径6cm高さ5cmである。出山遺跡と比較する



第36図 各地出土の製塩土器 (1/4) (1~8 刈羽大平遺跡, 9 栗原遺跡, 10 今池遺跡, 11~13 送  
り崎遺跡, 14~16 背の沢古墳), (1~8 品田ほか1985, 9 坂井1982, 10 坂井1984, 11~13 金沢1966,  
14~16本間ほか1966より)

と、ずんぐりした感じを受ける。6はいわゆる能登式製塩土器の柱状脚にも類似するが明確でない。

### 3. 栗原遺跡（新井市栗原）（第36図9）

昭和52年～58年にわたり発掘調査が実施され、奈良時代の郡衙又はそれに相当する遺跡とされている。昭和56年度の発掘調査により1個の製塩土器が出土している。口径20.2cm、推定器高18.5cmを測る。平底の製塩土器である。外面に輪積み痕を明瞭に残すが、内面に刷毛目は見られない。S D25から出土しており、奈良時代前半のものである。

### 4. 今池遺跡（上越市今池）（第36図10）

越後国府の可能性の高い遺跡で、昭和55年度から昭和58年度にかけて発掘調査が実施された。B地区 S D104から一点の製塩土器が出土している。外面に輪積み痕を明瞭に残し、内面は指頭圧痕と粗いナデである。9世紀前半の土器と伴って出土している。

### 5. 佐渡地方（第36図11～16）

佐渡地方では現在約60ヶ所の遺跡が確認されている。この中で特に遺跡の集中が見られるのが相川町の二見半島で、その他、外海府にかけての海岸ぞいには点々と遺跡の分布が見られるが、反対側の両津市沿岸では、あまり確認されていない。

遺跡は多く確認されているものの、復元された土器ではなく、全体を窺い知ることはできない。背ノ沢古墳出土例（本間ほか1966）からすると底径は14～15cmほどであり、また口径は破片の感じからすると40cmを越えるような大形のものはなさそうである。送り崎遺跡出土例では3～4cmの薄手の破片も存在するが器形は不明である。また、大半の遺跡において円筒有孔器台が存在している。最近の資料では小泊瓜生崎において輪積み痕を明瞭に残した立ノ内タイプの大形土器が出土している。しかし、ここでは円筒有孔器台は出土していない。

### 6. 栗 島

栗島においても茂崎島遺跡で製塩土器が確認されている。佐渡のものと共通すると考えられ、また円筒有孔器台も存在する。瀬の鼻遺跡では、出山遺跡類似の棒状器台が出土している。

以上、県内の製塩土器について概観したが、北陸地方との比較において検討を加えたい。まず県内において、能登地方に見られるような倒壺形土器、棒状尖底土器は確認されておらず、すべて平底である。能登地方の製塩土器の変遷を見ると、倒壺形土器→棒状尖底土器→大形平底土器→（小形平底土器）と変化しており、棒状尖底土器が平底土器に変化するが7世紀末～8世紀初とされている。県内においては現段階においてこの平底タイプの土器しか確認されていないところからすると、古墳時代には製塩土器は存在せず、奈良時代に入る前後に初めて製塩土器が現われたものと推察される。

時代の把握される資料としては刈羽大平遺跡、栗原遺跡出土のものがある。栗原遺跡は内陸の遺跡であり、1個単独出土である。おそらく塩運搬に使用されたものと考えられる。8世紀前半にあたるものである。刈羽大平遺跡においては、口径が40cmを越える大形のもの、口径が

25~30cmの中形のもの、口径が10~15cmの小形のものと、3タイプが存在している。これらは、8世紀初頭と考えられる土師器と同一包含層において確認されていることから、これら製塩土器も同時期のものとして捉えていいのではないかと考えられる。両遺跡出土の製塩土器は、ほぼ同時期の所産であると言える。両者共に底部を厚く作っておらず共通的な部分が認められる。

9世紀後半から10世紀と考えられる立ノ内遺跡出土の土器にも、大形と中形が見られるが、刈羽大平遺跡のものと比べると器壁の厚いものが多く強く焼けた感じがあまり見られない。また器台は存在していない。立ノ内遺跡と同タイプの土器の出土している佐渡瓜生崎出土のものにも器台は存在しない。

このように県内出土の製塩土器は、8~10世紀にわたり確認され、すべて平底タイプであり、8世紀代には器台が伴うが、9世紀代以降と考えられる大形の平底土器には器台は伴わない。

ここで問題となるのが、出山遺跡の小形土器である。同じ平底とはいえ、他の平底とは全く系統の異なるものである。成形技法では、輪積み痕が明瞭でないこと、ケズリにより器厚を極端に薄くしていること、ハケ調整が認められること等の違いをあげることができる。器形的には、口縁部にきて外反が大きくなること、胴部が長いこと等がある。

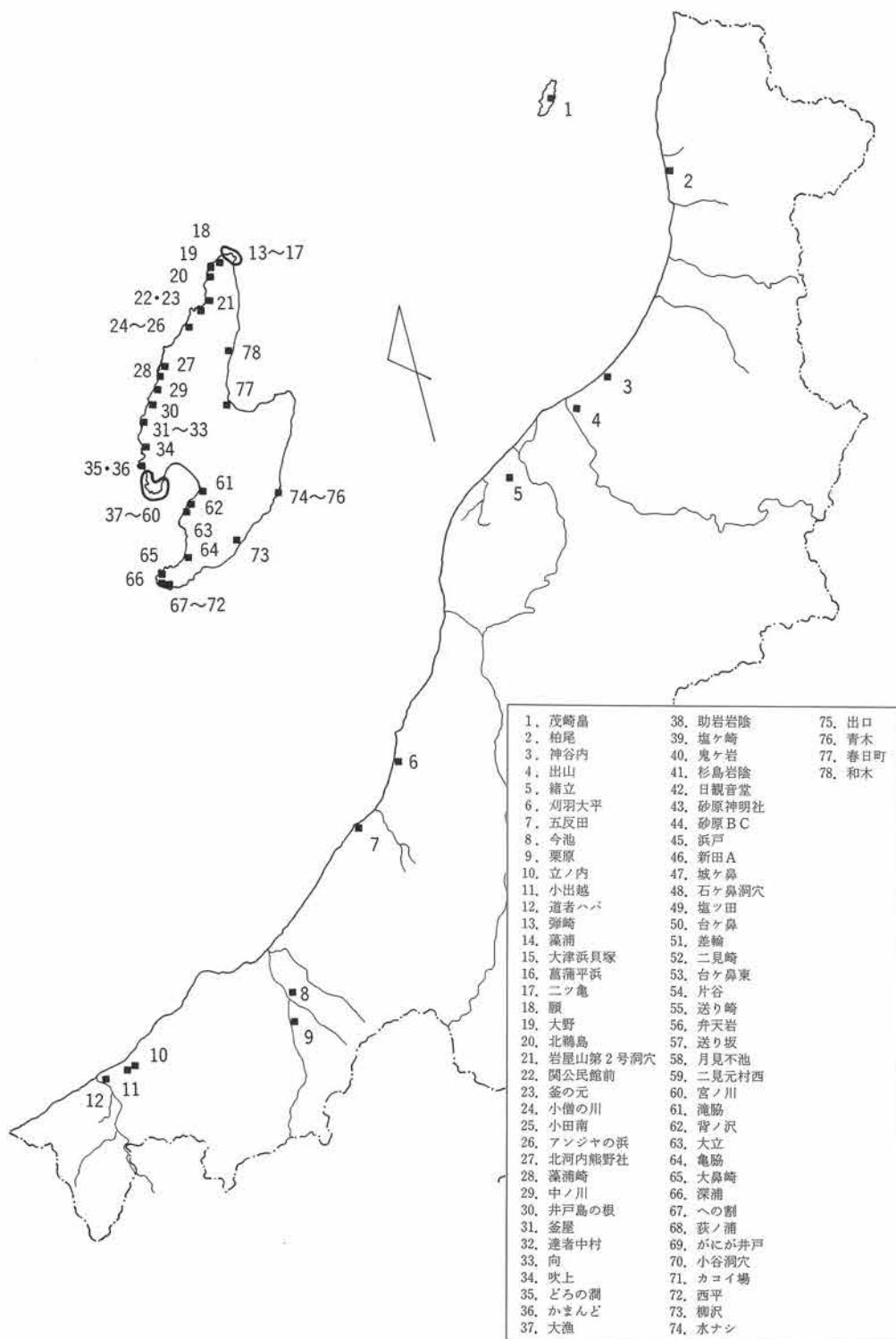
以上のような点において底部の違いを除けば共通的な要素が強いのが所謂「森越タイプ」と呼ばれる棒状尖底土器である。この棒状尖底土器は、能登半島において広く見られ、おそらく7世紀代に広く使われたタイプである。おそらく棒状部を砂地に突き刺して使用したものと考えられる。

出山遺跡のものは細い円筒状又は鼓形の器台を伴うことは確実であり、底部の観察において、円筒状に変色の見られるものがあることからすると器台とセットとして使用されたと考えられ、器台をある程度砂中に埋めて使用したものと推察できる。この出山タイプの土器及び器台は佐渡及び能登地方では確認されていないが、底部のみの破片では、石川県越坂遺跡・大迎遺跡・高波遺跡等（近藤1978）に小形の底部が見られ、あるいは、同タイプの可能性もある。東北地方においてもみられない。

型式学的には尖底から平底への変化は考え方として適當と思われ、棒状尖底土器と出山タイプが時間的並列関係にあったと考えるより棒状突底土器の変化したものとして出山タイプが出現したと考えた方が良さそうである。そしてその系譜は、やはり能登方面にあったと考えられる。

年代的には棒状脚の後であるので、7世紀後半~8世紀初めに位置付けることができる。そしてこの平底土器の出現と共に支脚も同時に出現している。

ここで問題となるのが、この土器が煎熬用か焼き塩用かということである。報告（関1986）によると、7地点において土器の集中が見られ、他の地点では平底大形のものも存在したとされている。8世紀にはすでに大形平底タイプが出現していることから考えれば、大形は煎熬用として、小形が焼き塩用として使用されたとの推測も可能となる。ただほぼ同時期と思われる刈



第37図 県内における製塩土器出土遺跡分布図（昭和54年度新潟県遺跡地図に最近のものを加筆）

## 2. 中世の遺構・遺物

羽大平遺跡には出山タイプの土器は出土していない。

以上のように奈良時代に入ると製塩土器は大きく変化することがわかり、奈良時代以前はかなり斉一的で単純な器種構成であったのに対し、奈良時代以降は平底を基本としながらも、器形・法量的にかなりのバラエティが認められるようになる。全く想像の域を出ないが、このことは、生産から流通の手段までその用途に応じて土器が作られたことを意味していると考えられる。

新潟県において製塩の始まったのが奈良時代の始まる前後であることを考慮すると、その背景には国家的な動きが反映しているとの指摘はすでになされている（関ほか1986）。

日本紀略の延暦21年（802）正月13日の条には「庚午、越後国米一万六百斛、佐渡国塩一百廿斛、毎年輸送出羽国雄勝城為鎮丘糧」とあり、佐渡からは毎年約120俵の塩が雄勝城に送られていたことがわかる。国家的事業として9世紀には塩生産が行なわれていたことになる。はたして、現在確認されている佐渡の製塩遺跡がこの資料に関連しているかどうかは共伴土器が明確でないため、はっきりしない。

## 2. 中世の遺構・遺物

### A. 遺物及び館跡の年代について

中世における県内の土器編年は、珠洲焼を中心に研究が進められ、最近ではこれに青磁、染付等の編年が比較、検討されるようになった。当遺跡についても、年代比定はこれらに依るものであるが、珠洲焼については吉岡編年（吉岡1982）、青磁、染付については上田編年（上田1982）、小野編年（小野1982、1985）をそれぞれ参考とした。

まず珠洲焼であるが、完形品に恵まれず、時期を把握できる遺物は少ないが、摺鉢の口縁部形態が比較的年代を反映してくれている。この中でA類としたものは各期に見られ、時期判断はむずかしい。次にB類としたものは、口縁部内面に波状文を有しており、また断面逆三角形状の形態から珠洲編年のV期とされる西方寺2号窯出土のものに類似している。またC類としたものは珠洲焼の中でも最終段階とされる西方寺1号窯出土のものに類似しており、これから考えて、上限はIV期とされる法住寺3号窯段階には遡り得ず、当遺跡の珠洲焼は、V～VI期にあたるもので、およそ15～16世紀前半の年代が与えられよう。

古瀬戸瓶子は、復元実測図から言えば、底部のすぼまりがなく、ややすんぐりした器形となり、古瀬戸編年の後期（藤沢1984）にあたるものと考えられ、およそ15世紀代ということになる。

青磁では、蓮弁がすでに線描きであり、蓮弁が幅広のものから細かいものへと変化することを考慮するならば、110、111が15世紀後半、112、113が16世紀前半の年代が与えられるのではないかと考えられる。また、無文の114についても山梨県新巻本村遺跡（上田1982）に類例があり、およそ15世紀とされている。119の皿は越前朝倉館（福井県教委1979）でも出土が知られ、や